細川俊夫のオルガン協奏曲がスイス初演

今季の「クリエイティヴ・チェア」に日本の作曲家、細川俊夫を選んだチューリヒ・トーンハレ管弦楽団は、細川作品に焦点を当てた1年を、彼の「オルガン協奏曲《抱擁》」スイス初演でしめくくった。

細川は「トーンハレ（会場）では音が混じり合いすぎるのでは」と心配していたが、新しいオルガンの製作工程からかかわったオルガニストのクリスティアン・シュミットは、「細川色」を上手く引き出し、教会を連想させるオルガンが西洋音楽の枠を超えたオーケストラに寄り添っていくさまを表現した。しかしヤクブ・フルシャ指揮の当楽団は大音響で応える。細川は「オルガンとオーケストラが離れている大きいホールのほうが、分離してお互いを優しく抱きしめることができる作品」と解説するが、音量が抑えられる部分では、水や風の音が聴こえてきたり、弦の美しさが際立ったりするので、やはりバランスの問題ではないか。「作曲家も、もう少し相手を優しく抱きしめる術を知っていれば」と謙遜する細川の言葉を借りれば、巨体の二人が体当たりに抱き合う感じはあったが、西洋音楽の要であるオルガンが、国境や先入観を超え、東洋と抱き合うようなヴィジョンを見た（6月30日、チューリヒ・トーンハレ）。

過去を発展させるチューリヒ歌劇場

7月2日、チューリヒ歌劇場での第6回フィルハーモニア・チューリヒ演奏会でピアノ・ソロを務めていたはずのラルス・フォークトは、昨年9月に病気により51歳で亡くなった。そのためこの公演は、フォークトの近しい友人クリスティアン・テツラフが弾くベルク「ヴァイオリン協奏曲《ある天使の思い出に》」へ曲目を変更した。リハーサル後、今度は指揮のジャナンドレア・ノセダ音楽監督も急病に見まわれたが、マルク・アルブレヒトが代役を立派に務めた。ときには足踏みする姿が葬送行進を思わせ、身体中から友の喪失感を絞り出して音に込めるテツラフの顔がだんだんフォークトに見えてくるなど、霊媒のような演奏で、最後の長いクレッシェンドがディミニュエンドで終わるとき、亡き友への友情が劇場全体を悼ませた。後半のブラームス「交響曲第2番」は、美しい音を紡いでいるのに先に進むパワーに欠けたが、前半のトランス状態を引きずったからか。最終楽章ではようやく前進するエネルギーに包まれた。

その他ウェーバー《魔弾の射手》の再演では、アクセル・コーバーがウェーバーの音楽を前回より深く振り分け、ジャクリーン・ワーグナーの声もアガーテに適した成熟を遂げていた（7月9日）。チューリヒ市長も臨席したビゼー《真珠採り》再演では、13年前のプレミエ時からナディールを好演しているハビエル・カマレナが、少し重くなった声を上手く処理し、ニコラス・カーターが指揮するビゼーのあまりの美しさに、何日間も余韻を残した（7月5日）。

ヴェルビエ音楽祭が30周年

スイス・ヴァレー州のリゾート地で1993年に始まったヴェルビエ音楽祭は、若手養成にも成果を発揮し、聴衆や批評家、そして音楽家にとっても次世代スターと出会える機会を提供している。

30周年の今年は7月14日、ズービン・メータ指揮ヴェルビエ祝祭管弦楽団が前半はユジャ・ワンのソロでラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番」、後半はベルリオーズ《幻想交響曲》を奏でて開幕した。豪華キャストのメイン・ステージ以外の小さな会場でも掘り出し物の音楽会が催されるので、2週間連泊したくなる。シェク・カネー=メイソンのクラブコンサートもその一つだ。彼のチェロを生で知る耳には、拡張された音が目の前で弾く彼との距離を隔たせるが、ドリンク片手に楽しむ雰囲気は稀有だ。ハリー・ベイカーのピアノでジャズ中心のプログラムで、J・S・バッハ「パルティータ」を基にした即興演奏では、J・S・バッハを現代に甦らせた。前日メイン・ステージで祝祭室内管弦楽団とエルガー「チェロ協奏曲」を弾いた際のアンコール曲、自作の「メロディ」で締めくくられたライヴはすべての境界を超え、終演後も聴衆が彼らを囲んだ。

ヴェルビエ音楽祭でベートーヴェン「ヴァイオリン・ソナタ」全曲演奏を行ったブシュコフ（左）と藤田（右）©Lucien Grandjean

当音楽祭の常連となっている藤田真央（p）も教会コンサートに複数回出演し、マルク・ブシュコフ（vn）とベートーヴェン「ヴァイオリン・ソナタ」全曲演奏にも挑戦した。

その初日、7月17日には二人の音楽性が交わっていく過程が見られた。「第1番」、威勢よく登場するブシュコフは激しく暴力的にすら聴こえるが、藤田の柔らかいピアノと合わさると、その音が変化していく。ヴィルトゥオーゾの合間に柔らかさが、鋭さの合間に愉しさが織り込まれていくさまは興味ぶかい。第2楽章では藤田の歌心にただ身を任せたが、終楽章では二人の若さが炸裂した。その勢いか、「第2番」も超高速で始まったが、ヴァイオリンがときおり重さを与え、ゴージャスに光る。ほほえむ藤田がメランコリックに第2楽章を弾き始めると、ヴァイオリンは鋭い哀感で応える。藤田のバランス感、浮遊感が常にリードしていたデュオだが、休憩後はブシュコフが完全に自由になって戻って来た。休憩で二人はなにか話したのだろうか。「第7番」では完全な音楽の対話を共に楽しみ、スリリングにクライマックスへ到達した。